

長野県短期大学付属図書館所蔵『源氏物語』写本二種について

平¹⁾ 林 香 織・吳²⁾ 羽 長

はじめに

長野県短期大学付属図書館には二種の『源氏物語』写本が所蔵されている。それぞれについて、太刀川清氏は、「長野県短期大学付属図書館和書解題(二)」(『長野県短期大学紀要』第四九号、平6・12)において、以下のように解説をされている。なおそれぞれの題目の上の数字(66・67)は、解題の際の配列の番号である。

66 源氏物語〔登録913.36-2-1~54〕

写本 列帖 枳形(16.8×18.2)五四巻五四冊〔表紙〕濃紺地
金蔎絵草木模様〔題簽〕書原題簽 中央「桐つほ」〔内題〕ナシ
〔丁数〕(省略)〔行数〕12〔字高〕13.3〔挿絵〕ナシ〔用字〕漢字平仮名〔備考〕物語。

67 源氏物語末摘花〔登録913.36-2-55〕

写本 袋綴 枳形(16.7×17.8)一卷一冊〔表紙〕萌黄色紙蔓草模様〔題簽〕書原題簽 中央「末つむ花」〔内題〕ナシ〔丁数〕全34〔行数〕12〔字高〕13.0〔挿絵〕ナシ〔用字〕漢字平仮名〔備考〕物語。〔源氏物語〕の「末摘花」の一巻の写本。

これら二種の写本について、それぞれ本文を吟味し、系統上の位置づけをしてみたい。

一 66 源氏物語

本文料紙は斐楮交漉、奥書・識語ナシ。中世末〜江戸初期の書写、第一冊「桐つほ」に太刀川清氏による解説の紙片が挿入され、ここでは「寛文頃(一六六一〜一六七二)書写」と断ぜられている。本写本は、専用にあつらえられた黒漆塗の木箱の中に収められており、いわゆる「嫁入り本」であると認められる。木箱の上扉には「源氏物語」と金泥で書かれる。

首巻「桐つほ」から「夢のうきはし」巻まで同一人による筆写である。一行十五〜十八字程度。

『源氏物語大成』に掲げられる諸本と対校すると、青表紙本に位置づけられるもので、稀に河内本と同じ本文をもつことがある。

以下、「桐つほ」巻・「あふひ」巻冒頭各四丁分の本文を掲げ、『源氏物語大成』に示される青表紙本本文との異同箇所を傍線で示し、本写本本文と異なる『大成』中の『源氏物語』本文を傍書する。その際、河内本本文と同じ記述の箇所については二重傍線

1) 〒380-0852 長野市三輪八一四九七 長野県短期大学

2) 〒930-0855 富山市五福三一九〇 富山大学

で示す。

「桐つほ」巻本文の対照に使用する『源氏物語大成』青表紙本系諸本の略号・略称・筆者並びに所蔵者は以下の通りである。

池 池田本〔大成〕「桐壺」(底本) 伝二条為明筆

桃園文庫蔵

横 横山本

横山敬次郎氏蔵

肖 肖柏本

桃園文庫蔵

三 三条西家本

三条西伯爵家蔵

大 大島本

道増筆

大島雅太郎氏蔵

また『大成』『葵』巻で大島本は道増筆のものではなく、飛鳥井雅康筆のもの(『大成』同巻底本)が用いられ、更に

榊 榊原家本

伝二条為氏筆

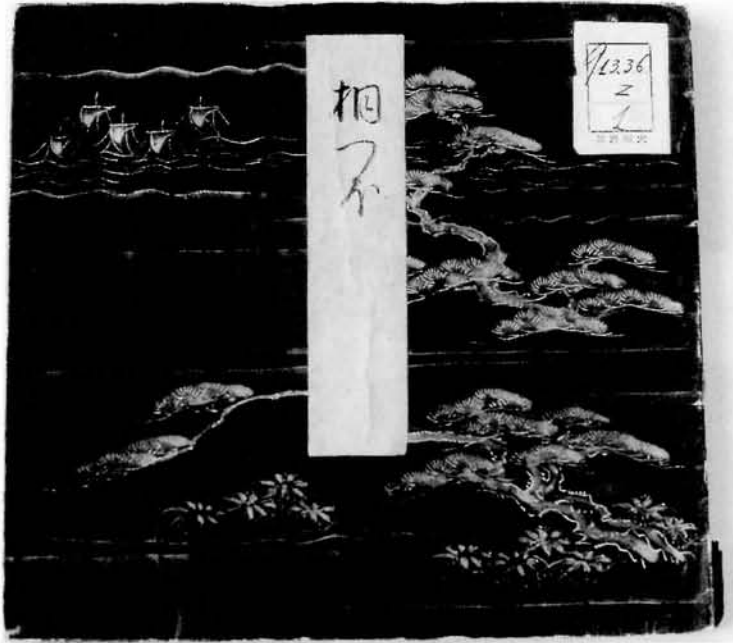
榊原子爵家蔵

が加えられている。

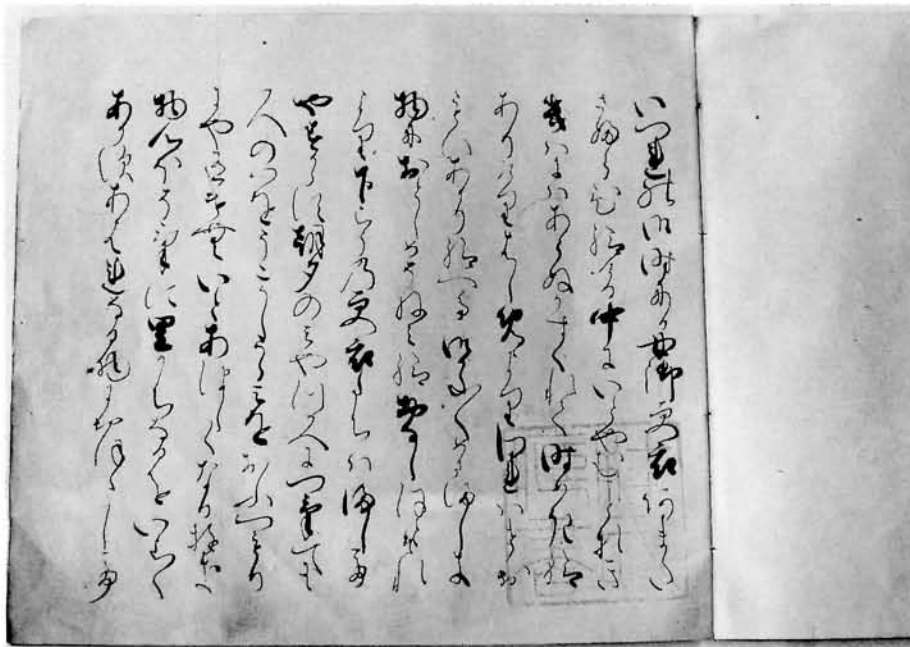
「桐つほ」

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給ける中にいとやむことなききはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめよりわれはとおもひあかり給へる御かたへくめさましき物におとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからす朝夕のみやつかへにつけても人の心をうこかしうらみをおふつもりにや有けむいとあつしくなりゆき物心ほそけに里かちなるをいよくあかすあはれなる物におほして(一丁表)人のそしりをもえはくからせ給はず世のためしにもなりぬへぎ御もてなし也上達部うへ人なとも

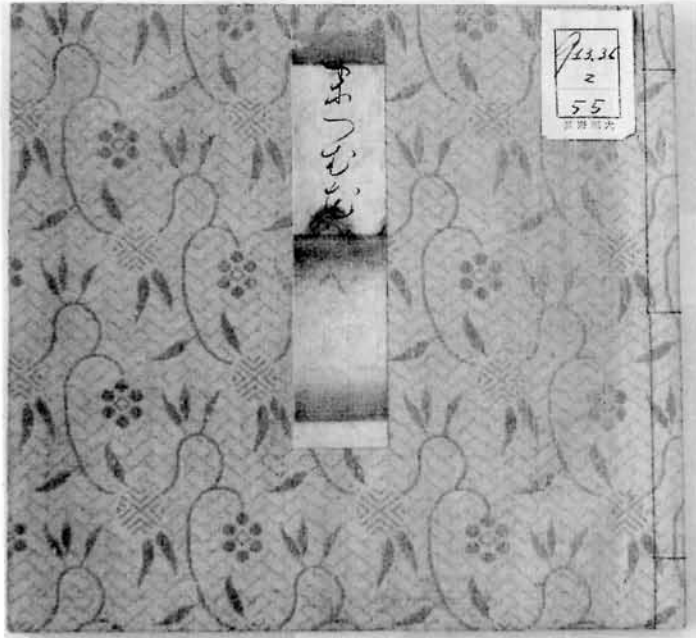
あいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもちしにもかゝることのおこりに世もみたれあしかりけれとやうくあめのしたにもあちきなう人のもてなやみくきになりて楊貴妃のためしもひきいてつへうなりゆくにいとほしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひたまふちよの(二丁裏)大納言はなく横りてはく北のかたなんいにしへの人のよしあるにておやうちくしきあたりて世のおほえはなやかなる御方へにもをとらすなに事のきしきをももてなし給けれととりたてはかしくしき御うしろみしなけれはことあるときはなをより所なく心ほそけなりさきの世にも御契やふかよりけんよになくきよらなる玉のをのこみこさへうまれ給ひぬいつしかと心もとなからせ給ひていそきまいらせ御らん(二丁表)するにめつらかなるちこの御かたちなり一のみこは右大臣の女御の御はらにてよせをもくうたかひなきまうけの君とよにもてかしつき聞ゆれと此御にほひにはならひ給へくもあらざりければおほかたのやむことなき御おもひにて此君をわたくし物におほしかしつき給事かきりなしはく君ははしめよりをしなへてのうへ宮つかへし給へきくはにはあらざりきおほえいとやむことなく上すめかしけれとわりなくまつはさせ給あまりにさるへき(二丁裏)御あそひのおりくになに事にもゆへあることのおしへにはまつまうのほらせ給ふるときにはお



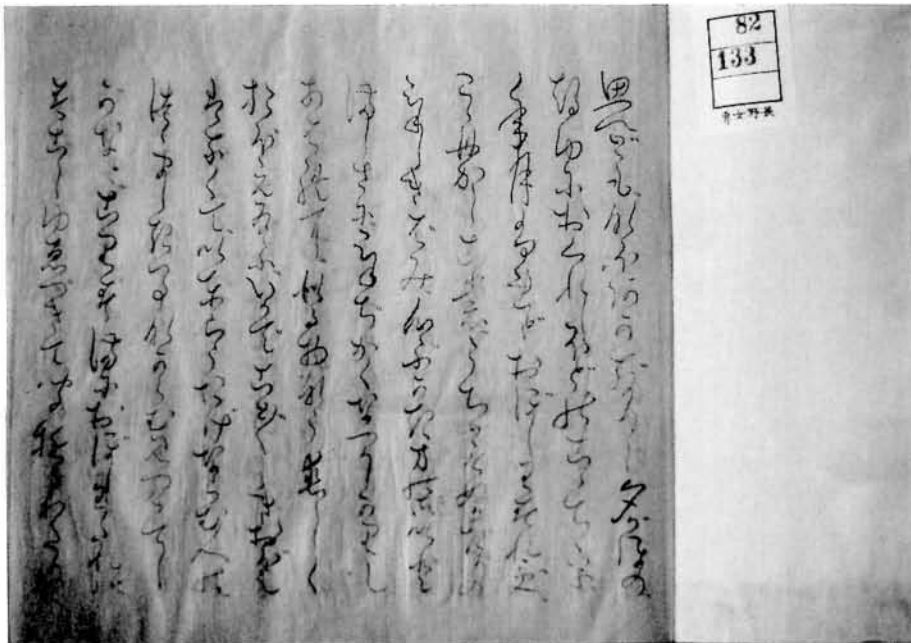
「桐つほ」表紙（濃紺地金蒔絵草木模様）



「桐つほ」本文（一丁表）



「末摘花」表紙（萌黄色紙蔓草模様）



「末摘花」本文（一丁表）

の御心はへいともたのもしけなきをおさなき御有さまのうしろめたなきにことつけてくたりやしなましとかねてよりおもほしけり院にもかゝる事なときこしめして故宮の「(二丁裏)いとやむことなくおほし時めかし給し物をかるくしくをしなへたるさまにもてなすなるかいとおしき事さい宮をもこのみこたちのつらになむおもへはいつかたにつけてもをろかならざらんこそよからめ心のすさひにまかせてかくすきわざするはいと世のときおひぬへき事也」と御けしきあしければ我御心ちにもけにとおもひしらるればかしくまりてさふらひ給人のためはちかましき事なくいつれをもなたらかにもてなして女のうらみなおひそとの給「(二丁表)にもけしからぬ心のおほけなきをきこしめしついたらむときおそろしけれはかしくまりてまかてぬ又かく院にもきこしめしの給はするに人の御名も我ためもすきかましういとをしきにいとやむことなく心くるしきすちにはおもひ聞え給へと又あらはれてはわざともてなし聞え給はず女もにけなき御としのほとをはつかしうおほして心とけ給はぬけしきなればそれにつみたるさまにもてなして院にきこしめしいれ世中の人もし「(二丁裏)らぬなくなりたるをふかうしもあらぬ御心の程をいみしうおほしなげきけりかゝる事を聞給にも朝かほの姫君はいかて人にしとふかうおほせはかなきさまなりし御返しなともおさくなしさりとて人にくはしたくもてなし

給はぬ御けしきを君もなをことはりとおほしわたるおほとのはかくのみきためなき御心を心つきなしとおほせとあまりつゝまぬ御けしきのいふかひなければにやあらむふかうしおもむし聞え給はず御心くるしきさま「(三丁表)の御心ちになやみ給て物心ほそけにおほいたりめつらしくあはれとおもひ聞え給はうれしき物からたれもゆしうおほしてさまの御つしみせさせ給かやうなる程いと御心のいとまなくておほしをこたるとはなれれとたえおほかるへしその比齋院もおり給てきさいはらの女三宮の給ぬみかときさきいとことに思ひ聞え給へる宮なればすちことになり給をいとくるしうおほしたれとこと宮たちのさるへきおほせすきしき「(三丁裏)なとつねのかんわさなれといかめしうのしるまつりのほとかきりあるおほやけことにそふ事おほくみ所こよなし人からとみえたりこけいの日上達部などかすきたまりてつかうまつり給ふわさなれとおほえことにかたちあるかきり下かさねの色うへのはかまのもん馬くらまでみたとのへたりとりわきたるせんしにて大将の君もつかうまつり給かねてより物見車心つかひしける一条のおほち所なくむくつけきまでさはきたりところの御さし「(四丁表)心しつしたるしつらひ人の袖くちさへいみしき物見也おほとにはかやうの御ありきもおさくし給はぬに御心ちさへなやましければおほしかけさりけるわかき人はい

てやをのかとちひき忍ひてみ侍らんこそはへなかるへけれお
 ほよそ人たにけふの物見には大將殿をこそはあやし山かつ
 さへ見奉らむとすなれとをき国くたく、青ノ金よりめこをひきくしつも・大儀神書ま
 うてくるを御覽せぬはいとあまりも侍るかなといふを大宮き
なる・大儀神書
 こしめして御心ちもよろしきひま也（四丁裏）

以上掲出した本文について見ると、本写本は『源氏物語大成』
 に掲げられた青表紙本系諸本には見られない本文をもつことがあ
 る（「桐つほ」第四丁表「うつさせて」・「あふひ」第二丁表「まか
 て給ぬ」・第三丁表「はしたく」・同「ことほり」同「御心くるし
 き」など）が、これらの箇所はここで見る限り他の青表紙本系本
 文に対し一単語が脱落するか書き加えられている程度で、際だっ
 た独自本文というほどではない。他に『大成』底本等との異同を
 検討するに、それらは底本に対する対校諸本（青表紙本）との異
 同の範囲のものであり、その異動箇所の中には、他者の記述の方
 が文脈上ふさわしいという場合も見とめられる。本写本は、『大
 成』所収の青表紙本系対校本文並みの善本の位置にあるといえる
 が、独自本文箇所が文脈上深い意味合いをもつなどして全体とし
 て優れた本文を主張するものかどうかは、なお右に掲出した以外
 の部分で検討がなされる必要がある。

河内本と同一本文をもつ箇所もわずかに見られるが、それらは、
 本写本で河内本のみにある本文箇所は二つ認められるのみ（「桐
 つほ」第四丁表「あるときは」・「あふひ」第二丁裏「うしろめた
 なき」）である。

二 67 源氏物語末摘花

本文料紙は斐紙薄様。江戸時代、それも中々後期の写と思われ
 る。奥書・識語ナシ。一行十四〜十七字程度。本文に濁点が施さ
 れ、また各文節の間に朱による点が施されている。

基本的に青表紙本系の本文であるが、河内本独自の記述が各所
 に認められる。以下に、冒頭部の四丁分を翻刻して掲げる。二重
 傍線を施した所は河内本と同じ本文の箇所である。また『源氏物
 語大成』の青表紙本諸本と異同のある箇所については傍線をもつ
 て示し、その各本文を傍書する。本写本の本文の対照に使用する
 『源氏物語大成』青表紙本系諸本の略号・略称・筆者並びに所蔵者
 は以下の通りである。

大	大島本	〔大成〕	「末摘花」	底本	飛鳥井雅康筆
横	横山本				大島雅太郎氏蔵
池	池田本		伝二条為明筆		横山敬次郎氏蔵
肖	肖柏本				桃園文庫蔵
三	三条西家本				桃園文庫蔵
					三条西伯爵家蔵

思へどもなほあかざりし夕がほのつゆにおくれしほどのこ
 ちを年月ふれど おぼしわすれずこもかしこもうちとけぬ
 かぎりのけしきばみ心ぶかき方の御いどまじさにけちかくな
 つかしかりしあはれににる物なう恋しくおぼえ給ふいかでこ
 とくしきおぼえはなくていとらうたげならむ人のつしまし
 き事のなからむみつけてしがなとこりすまにおぼしわたれば

すこしゆゑづきて聞ゆるわたりは「(一丁表)御みよ
とめ大御ノとめとまり給はぬくまなきにさてもやとおほしよるばかりのけは
ひあるあたりにこそはナシ大一くだりをもほめかし給ふめるにな
びき聞えずもてはなれたるはをさくあるまじきぞいとめな
れたるやつれなう心づよきはたとしへなう情おくるよまめや
かさなどあまりものよほどしらぬやうにさてもすぐしはて
ず名残なくくつほれてなほくしきかたにさだまりなどする
もあればの給ひさしつるも「(一丁裏)おほかりけるかの空
蟬をものよをりくにはねたうおほしいづ荻の葉もさりぬべ
き風のたよりあるときはおどろかし給ふをりもあるべしほか
げのみだれたりしさまはまたさやうにても見まほしくおほす
大かた名残なきものわすれをぞえし給はざりける左衛門のめ
のととて大我ナシ大のあまのさしつぎにおほいたるがむすめ大輔の
命婦とてうちにさふらふわかむとおりの兵部大輔なるがむす
めなりけりいといたう色このめるわか人ウ「(二丁表)にてあ
りけるを君もめしつかひなどし給ふはは筑前のかみのめに
てくだりにければちよきみのもとをさとにて行かよふこひた
ちのみこのすゑにまうけていみしうかなし大御かしづき給ひし御むす
めこゝろほそくてのこり給へるをことた大御給たるを西三のついでにかたりき
こえければあはれの事やとてとひきく給ふ心ばへかたちな
どは福ふかきかたはえしりはべらずかいひそめひとうとうも
てなしたまへばさよひなど物ごしにてぞかたらひ侍るき

んをぞなつかしきかたらひよととは福思ひ給へる「(二丁裏)
と聞ゆればみつの友にては今ひとくて大御さやうたてあらむとて
我に聞せよちよみこのさやうのかたにいとよしづきてものし
給ひければおしなへての手づかひにはあらじとな福大思ふとかた
らひ給ふさやうにきこしめすばかりには侍らずやあらむとい
へばいたう気色ばましや此比の朧月夜に忍びてものせむまか
でよとの給へばわづらはしと思へどうちわたりものどやかな
る春のつれくににまかでぬちよの大輔のきみはほかにて福そ住
けるこゝにはときくぞかよひける命婦は「(三丁表)まよ
はよのあたりはすみもつかずひめ君の御あたりをむつびて
こゝにはな福はくるなりけりの給ひしもしるくいさよひの月おかし
きほどにおはしたりいとかたはらいたきわざかな物の音すむ
べき夜のさまにも侍らざるにときこゆれど猶あなたにわた
りてたゞひとこゑもよほしきこえよむなしくてかへらむがね
たかるべきをとのたまへばうちとけよるすみかにすゑ奉りて
うりそめたうかたじけなしと思へどしんでんにまゐりたれば
まだかうしも「(三丁裏)さながら梅のおかしきを見いだし
て物し給ふよきおりかなとおもひて御ことの音いかにまさり
侍らむと思ひたまへらるよのけはひにけしき大御さそはれ侍りてな
む心のあはたよしきいで入にえうけたまはらぬこそ口をしけ
れといへばあはれは福三きよする人こそあなれもよしきに行かふ人のきく
ばかりやはとてめしよするもあいなういかゞきく給はむとむ

ねつぶるほのかにかきならし給ふおかしう聞こゆ何ばかりふ
 かき手ならねどもゝねがらのすぢことなる物な」(四丁表)
 れば聞にくゝもおぼされずいといたうあれわたりてさびしき
 所にさばかりの人のふるめかしうところせくかしづきすゑた
 りけむ名残なくいかにおもほしのことす事なからむか、やうの
 所にこそ、昔物語にも哀なる事ども有けれなど思ひつゞけて
 ものやいひよらましとおぼせどうちつけにやおぼさむとこゝ
 ろはづかしくてやすらひけるに命婦かどあるものにていたう
 みゝならさせ奉らじとおもひければくもりがちに、侍るめり
 まらうどのこむと侍りつるいとひがほにも」(四丁裏)

本写本には河内本の本文が混じるが、その河内本本文をとる箇
 所が他の青表紙本の全てと異なるというものは、右四丁において

は二例のみであり(第二丁表「大輔なるが」第二丁裏「ことにつ
 いで」)、このことから本写本は青表紙本系統の中に位置づけられ
 るべきものといえる。他本との異同箇所を吟味するに、本写本の
 本文内容が文脈上他本に劣るというほどのことはなく、河内本を
 含め意味的に吟味がなされつつ校合された段階をもつ一本と認め
 ることができる。河内本との交渉を考える上で、有意な資料とも
 なる一本と思われる。

〈付記〉

本稿は平林・呉羽の共同執筆としたが、執筆の分担は特にせず、
 それぞれ独自に調査した結果を持ち寄り合議することで、成稿と
 したものである。

本論で調査した写本二種の内、66「源氏物語」五四巻について
 は、平林がその「桐つほ」等の巻の翻刻作業を終えており、別途
 機会を得て公にする予定である。